
占夢者人の夢 ～伍ノ巻～

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢　　ゝ伍ノ巻ゝ

【Nコード】

N3514E

【作者名】

星河　翼

【あらすじ】

叶達一行は、広島を立ちそして東へと航路を取る。そんな頃、雅樹達は、青森県の恐山へと最期の五行の元に辿り着く。そして、金の陰陽師を仲間にする為に賭けを承諾した。最後の一人は女子高生くらいのイタコ。そして、平行時間に叶は初めて夢を見た。予言書は、形を取り始めている。波乱になっていく第五巻開始！

#1 出立

『誰の道呼ぶや 八日の仏の道呼ぶや ここらずの極楽のほいじの
枝にて何がなるや 南無阿弥陀仏の六字なるや 森か林から来るべ
きか 幾日幾日 来る道お茶の道 どこに姿がいるものか どこに
姿がいるものかや 数珠の響きで 向かえる弓の響きではやむける
や ところがところがないや 白い装束で 白い姿で降りて遊べや
その身やくやうちにも つりおばついにつく 八日の仏の見ぬが為
に悲し仏様や ここはどこだよ葛西の座敷の間でや降りて物語り
総領か けさであとようかかなーイヤ』

口寄せ祭文^{イタコ}

『民族資料選集座女の習俗2より』

出立

雨の広島は、一日をおき晴れ渡っていた。風は薄つすらと身体を
冷やす程度で、冬にしてみれば心地良い秋の残像の色を落としてい
る。全く一昨日の事が嘘では無いかと思わんばかりだ。

そんな日、ホテルのロビーで直紀は、今迄待ちに待った者達の姿
を直視していた。片腕に抱えた荷物をひっ掴んだ状態で……

昨日、待ち合わせをしたはずのこのホテルのロビーに現れなかつ
た者達……そう、実はあの後、疲れ切った朔夜達はあるまゝ直紀が
来る事を忘れ去り、寝込んでしまったのである。それは熟睡と言っ
より爆睡と言った方が良いかも知れない。

すっかり、楽しみにしていた夕御飯迄をも食べ損なうほどに。

そのロビーで直紀は一時間待った。待つのは慣れている。仕事柄、
忍耐強い精神を兼ね備えているからであつた。しかし、流石に五時
間待たされるとなると、直紀も心中穏やかでいられるはずも無い。
予め登録している朔夜の携帯電話に掛けたが応答無し。

仕方なく先に聞いていたルームナンバーに、フロントから連絡を

入れてもらう事にしたのである。

しかし、その電話に出たのは全く聴き覚えの無い声の主……潤であつた。直紀の知らない者とあつては文句のつけようもない。

「起した方が良いじゃろうか？」

受話器の奥の少年の声に、

「出来ればお願いしたいのですが……」

人がこんなに待っているのに、寝ているだと？腸が煮えくり返りそんな気持ちを押さえて直紀は、少年に心の内を悟らせないようになるべく穏便に伝えた。

電話の奥で少年が朔夜と叶を起そうとする声が聞こえている。しかし、

「申し訳ないんじゃけど……お二方ともグッスリおやすみの様じゃけ……」

潤は、ピクつともしない二人に諦めの声で直紀に話して聞かせた。直紀はこめかみの一本の血管がブチツと切れた。様に思えた。が、少年には全く関係が無い。悪いのは、朔夜と叶である。が、しかしここに来てやっと重要な事を思い出したのである。

「解りました。わざわざ申し訳有りません。手の掛かる友人、二人で……では、起きられましたら、御連絡下さい。今日はこのホテルに城戸が泊まりますと……明日、朝八時にロビーでお待ちします」と

潤は、城戸と名乗ったその者の言葉をそのまま聞き取り、静かに電話を切った。

直紀は、朔夜の体質を思い出したのである。

「都住は一度眠ったら、何をしても起きないんだった……」

見ず知らずの少年と一緒にいたら、五行の一人と出逢ったと推理出来る。つまり、また一人仲間にする事が出来たのであるのだ。と言う事は、何かしらの理由で、占夢を行った。疲れ果てているのであろう。

高校時代。不可思議な出来事に直面する度、朔夜の占夢を目の当

たりにしたものであった。それには必ず叶も伴う。それは、中学の時からそうだったと話に聞いていた。その場面が今でも直紀の脳裏を掠める。

不思議な光景だった。自分には全く無い物を二人は持ち合わせている。だから、決めた。自らこう行つた類いの事で裁けない事件を解決する側。警察官という現場の中にその事象を見い出す手助けができればと。そして、今、まだその領域に達してはいないが、一つの点を見い出し、広域の警部としてこの旅に参加している訳だ。

「しかし……都住は良いとしてだ。塚原は何をやっているのだ！」
直紀の怒りの鋒先は直ぐさま叶に向けられたのである。

直紀の目に映つた先のフロントで、一人の阿呆顔を張り付かせた青年が支配人ともめていた。

「だからやな！夕飯食つとらん言うところか？その分負けてくれ言うてるんや！ダメなんかい！」

直紀は頭を抱えなくなっていた。こんな所迄来て食い意地とケチが重なっているとは……そんな思いを抱えて背後から声を掛けようとした時、

「叶？もう良いでしょう。非が有るのはこちら側なのですから……起きていなかった……夕飯の事を忘れて迄寝ていたのは僕達なのですよ？」

流石に、この剣幕で周りの者達に迷惑が掛かっている事を何とかしようと朔夜がなだめようとしているみたいである。

「やけどなあゝ！ここでの食事楽しみにしとったんやで俺は！」

一歩も引こうとしない叶に、

「朔夜ちゃん……こんなバカほつておいて、早く精算しようよ！注目浴びてるあたし達ってかなり迷惑だよ？」

「そうそう！叶お兄ちゃんがただ単に間抜けだっただけじゃない？私はちゃんと食べたもん。何の問題も無いもん」

二人の女性はそんな事を言つて退ける。この場で夕食を食べ損な

ったのは朔夜と叶の二名であつた。二人と同室だった潤は、夕飯時に起しに来てくれたかえで達と共に、このまま起こさないで良いのであるとかと後ろ髪を引かれながらも夕飯を摂りに行ったのである。だから、ここで朔夜が気にならないと言つのであるならば、叶一人がこだわっていると言つても良い。

「うっ！」

かえでと水城からの冷たい攻撃にあい、一瞬怯んでしまう。手厳しい二人であるからこれ以上ここで踏み止まって値切っても意味をなさないのである。とそう思われる。

「さあ、叶。もう良いでしょう？」

朔夜は、そりや良いだろう。でもな……食いものの恨みと言つ物は恐ろしいんやで！心の中で何度も何度も繰り返していた。しかし、それを遮る言葉がついにここで起こつたのである。

「いつ迄俺を待たせる気だ？塚原！」

「直紀？」

素っ頓狂な表情にイラついた直紀は、

「直紀？……では無い！この阿呆！食い意地を張るのもいい加減にしないか！人が昨日から一体どれだけ待っていると思つているのだ！」

目が血走っているかのような……夜叉が降臨しているかのような形相で直紀が叶に捻りよつていた。

すると、半身を返すと冷静な仮面を被り、

「支配人。コノ阿呆……基い。この者の支払いだが、これで受け取つておいてもらえないだろうか？領収証も上様で発行してもらいたい」

「ちよい待ち！潤の分も払わなあかんのやで？」

叶は、慌てて言う。

「ふん！では二人分の勘定でお願いしたい」

背広の内ポケットから財布を取り出すと、二人分の宿泊代のお札をカウンターに置く直紀。その様子に支配人は、この争いに決着が

つく良い機会だとその勘定をホテルの従業員に促す。すると、おつりと領収証が返って来た。それを受け取った直紀は、直ぐこのカウンターから離れるように叶の頭を鷲掴みにして引きずり歩き出す。「そのロビーで話そうじゃないか」

こうして順番を待っていた朔夜が支払いを済ませる中、やっとその場を離れる事が出来たのである。

人数分の席を確保出来るロビーには、支払いを終えた者達と直紀が一堂に会する。初めて顔を合わせる潤は、少し無愛想な直紀に恐いイメージを抱いていた。が、

「君が……潤君と言ったかな？新しく仲間になったのかい？昨日はどうもすまなかったね。これからは宜しくお願いするよ」

見た目が少年だからか？少し不器用な微笑みではあったが友好的な態度と言葉で接してもらえた事に安堵を覚えた。

「こんな者じゃけど、こちらこそ宜しく御願い致します」

自分の境遇は朔夜や叶も話をする様子は無い。だから逆にホッと出来た。今の自分自身をありのまま見てもらえるのであるのだからそんな中話はこれからの事になった。

「で、これから先はどうするのだ？」

直紀が持ちかけた。

「うーん。これからは勘に頼るしかないんよなあ。残りは東北と北海道のどちらか？やからなあ」

陸奥の国と言うとかなりの広域範囲。確かにピンポイントを突く事は出来ない。しかし、これがこの先肝心な役割を担っている者の言葉とは思えないので、直紀は苛ついてしまった。

「当ても無く彷徨うつもりか？ばか者！」

「んな事ゆったかで、確実にここやって言えるとこ判らんもん仕方なかるが！それとも直紀は何か良い案が有るとも言うんかい！」

喧々囂々と続く会話に、この二人だけだと話が進まないと察した朔夜は、

「かえでちゃん？時刻表は持参してますか？」

「え？うん……持つてるけど？何の時刻表？」

言い争っている二人を背景に、かえでは朔夜に話を持ちかけられた通り頷く。

「新幹線ですよ」

「あ、それならこれよ」

自らの荷物の中からコンパクトな冊子を取り出すと、未だに続いている罵声を五月蠅いと言わんばかりに『バンッ』とテーブルに叩き置く。流石にその音に気付いたのか、直紀と叶の言い争いは止まった。

「何や？その時刻表……それでどうするつもりなんや？」

全く気が付かない様で有る叶に、

「なるほど。その手が有るな……」

と、直紀は気が付いている様であつた。

「そうだよね、朔夜おじちゃんは賢いや！」

水城も気が付いている様である。

「何や何や？訳解らんわ……」

小首を傾げて考え込んでいる叶に、

「叶にも解るように、説明しましょうか？つまり、北に向って陸地を辿って行くと言うことですよ。残りは東北と、北海道。実際そのどちらかの者は、雅樹君が仲間になっている訳でしょう？なら、北に向って行くのが正解です。それも、陸地を縦断して行けば、そう、叶が勘を頼りにすると言うのであれば、近くを通れば何かしら解るでしょう？すれ違えば、良い訳ですから？」

朔夜は叶の頭でも分かるようにそう言った。

「飛行機だつたらすれ違う時つてのがイマイチ解らないよね？いくら叶お兄ちゃんが鈍感でもこれなら上手く行く気がするよ」

含み笑いを浮かべながら、言葉を発する水城の様子を伺い、

「ククク……塚原お前立つ瀬ないな！こんな子に返はつきり言われてれば！」

そこで思いっきり爆笑が起こった。叶は何やねんみんなして！と言う顔で苦笑いする他無かった。

「それでは、まず、広島駅から東京迄戻りましょうか？そこから上野に出て、東北方向に進むと……」

まず開いた路線図を見ながら朔夜は口を開いた。

山陽、阪神、東海道、と言う順に紙面の路線を指で撫でて行く。

「そうね。それがベストだとあたしも思うわ」

「ふむ。でも、新幹線で良いのか？」

「各駅停車の鈍行で進んどったら、二人目の仲間をマサキに奪われてまうで！」

こちらが先攻しているとは言え、ゆっくりしている訳には行かない。

「東北方面になったら鈍行でも良いんじゃないかなあ？その方が叶お兄ちゃんの勘も働きやすいだろうし？」

少し意味ありげに、流し目をして『チロン』と叶を見る水城に叶は舌を出してしかめっ面をした。確かに、何となくは解る五行が示す方向。でも、ここだと言い当てた事などは無かった。無意味に近いのだと自分でも分かっているもの、どうにも出来はしなかった。確実に分かっているのは一つの点が消えたと言う事だけである。「よっしゃ！なら行動を起すかあー！同俺についてこいや！」

いきなり張り切り出す叶。しかし、言葉とは裏腹に自信は無かった。とにかく当事者である自分がしっかりしなければ周りが困るだろう。船頭が誰なのか解らなくなる。ここ迄ずっとこの仲間達に救われて来た。自分が誰かを助けたと思われる事は無い。

だから、見せ掛けだけでも威厳が有るように振る舞わなければならぬと思ったのである。

そんな叶の掌を、このホテルを出る際、潤がギュッと握りしめて来た。

「大変じゃけど、わ……僕に手伝える事が有れば言ってくだされよ

？」

潤は、少年らしい微笑みで笑い掛けて来た。無理しているようにも思われたが、潤の少年としての努力。それが心配りだと分かったから、叶は潤の頭をクシャクシャと掻き混ぜた。只でさえ、癖が有る長い髪の毛がより一層絡まった。

「叶！潤君の髪をそんな風に掻き混ぜないの！せっかく綺麗に纏めたのに」

かえでがその行動を非難する。しかし、叶は心が踊っていた。ただ自分の何を分かっているのか解らない潤が心を寄せてくれた。それが素直に嬉しかったのである。

#1 出立（後書き）

もう、三年と言う年月がたってます。元々同人誌として出してたのですが・・・もう時間経ち過ぎていたので、出すことは出来ません。なので、ネット上での公開。ああ、この伍ノ巻を書き始めてから・・・時間経ちすぎ。途中で止まっていたのですが、その続きを書き始めようかなと云った感じです。途中から更新が遅れるかもですが、最期までお付き合い頂けると嬉しいです。

#2 イタコ

イタコ

雅樹、泊が、択捉島を出航したのは出逢ってから二日後の事であった。既に、叶達が広島で仲間と遭遇している頃である。齒がゆい気持ちが無かった訳では無かったが、悪天候で船が出なかった。その為足止めを食らったが、三日後の朝は好天候。そして、やっと北海道迄足を地に着ける事が出来たのである。

「どうやら、敵はもう一人を仲間にしたようですね……」

雅樹は、北海道を南に縦断する汽車の中、隣に腰掛けている泊に零した。

「そうなのか？ 儂には分からんがのう。お前には分かるのか？」

泊は不思議になり雅樹を見下ろす感じで眺めた。

雅樹は、何やらギュツと掌で胸の辺りを掴んでいる。その事が奇妙に感じられた。

「一体、お前は何を胸にしまいこんどるんだ？」

「ん？これですか？」

雅樹は、厚着した服の中から取り出したのは笛型のロケット。それは少し年期が入って古びているように感じられた。

「何じゃい、そりゃ？」

「核ですよ。この旅の……」

「核？核兵器なんて言うんじゃ無からうな？」

「ククク。そうだったら面白いですけどね？残念ながら違いますよ。方位磁石みたいな物です」

「ああ、コンパスか……」

「これのおかげで、五行の位置が分かるんですよ」

雅樹は大切そうにそのロケットを優しく包むようになでる。そして再び胸元に締まった。

「で、後一人となった五行の一人はどこにおるんだ？」

話の中で、もう一人の場所が分かっていると云った雅樹の言葉を思い出しながら泊は尋ねた。

「青森の、恐山です」

「恐山？まさか、その者はイタコだともいうのではなからうな？」

「そのまさかですよ。既に顔は出しておきました。返事待ちです。どうやら、五行として目覚めていない様子なので……」

そう。盲目の彼女はまだ五行としての自覚が全く無かった。イタコとしては一流だと言うのに……そして、自分の相剋である金の陰陽師の要素を持っている以上無理矢理仲間にするという訳には行かないので、ただ顔出ししたに止めた。そして、次訪れる迄に答えを出してもらうように言い含めておいた。

「そんなので、仲間にできるのか？」

「なつてもらわなければなりません……それをお願い出来るのは、土の五行である貴方が必要なですよ、泊さん？」

なるほど。土である自分は、金とは相生である。

つまり相性は良い。自分が上手くやれば仲間になるかも知れない。「それで、儂の所に来た訳か……お前賢いのう」が、しかし、儂が仲間にならなかつたら何も始まらなかつただろうよ？違うか？」

泊は含み笑いをした。土も金も、木の五行である雅樹には相剋の人物だ。かなり計算をしなければ仲間になる確率は低い。それでも、泊を仲間にした。

雅樹の中に潜む意志と言う物は、とてつも無く固いのであろう。

「そうですね。でも自信は有ったのですよ？」

今度は、雅樹が含み笑いをする。その態度に食えないやつだと泊は思った。でもこういう人物だから仲間になる決心もついた。話の内容も現実味が有る。ある意味恐い気もするが……今迄守りに守ってきた言い伝えを裏切る事になったのであるのだから……

でも、心の中で思いはしなかつたか？こんな言い伝えの為に自分の将来をあんなへんぴな所で過ごさなければならなくなつた運命を

憎いと……外の世界に出たいと思った事が今迄無かったか？いや、思わない日は無かった。こうやって外に出る事が出来た。それを嬉しく思う。そして、これから始まる新しい世界を追い求めたいと思うっていた。

「この先ですよ」

長い道程。行き着いた先。恐山に到着した二人は覆い繁る木々の山の中に入って行く事となる。

「勝手に入って行って構わないのか？神聖な土地やぞ？」

泊は、後ろを気にもしないでズンズンと進んで行く雅樹の後ろをつかず離れず歩く。

「構いませんよ。木はオレの味方ですから……それに神聖な場所は木々達がちゃんと教えてくれます」

こんな所に人が住んでいるのかとも思える山奥迄足を運ぶ。泊は今自分がどこを歩いているのかなど見当もつかなかった。ただ、導かれるまま雅樹について行く。しかし、この地に流れる靈気は澄んでいる。土から得られる情報。それが今自分が踏んでいる土地を感じて体全体を突き動かした。

「あの小屋ですよ」

清流の川の向こうに小さな小屋が在った。見た目朽ち果てているかのように小汚く感じられるが、その場所に立ち籠めている靈気は神聖な物に感じられた。

「彼女は目が見えませんが、確かに五行の金の陰陽師です」

先に伝えておく。とでも言うかのように発せられた言葉には重みがあった。そして、淀み無い小川を渡ると二人は速やかに小屋の戸を叩いたのである。

「再び参りましたが、御決心はつきましたでしょうか？」

雅樹は少し謙った言い方をした。泊は目の前の豪勢な祭壇をバツクに座っている、まだ高校生くらいの女性に目を奪われていた。かなりの美人だった。

瞳が開いていればまた印象が変わるかも知れないが、異様に色香

が有るように感じられた。姿勢もそうだが、かもし出す雰囲気は高校生が持っているものとは考えられない。だからこの者が自ら見聞きして来たイタコと呼ばれる者とは思えなかった。

「ええ、決心でしょうか？あたいがこの地を離れる事が出来ない事は分かっておりましよう？おかしな事を訊かれる者よのうゝこの目で外に出るなどもつての他ではありません事？それに、あたいはイタコであります、陰陽師ではございませんわ？ホホホ……」

まだこの場を持ってそのような事を言つて来るとは？とても言いただけである。

「ですが、金谷よし乃さん？あなたは確かに陰陽師なのです。オレの相剋の金の陰陽師！そして、この隣にいるのが土の陰陽師、泊源蔵です。先に話しておきましたが、このように仲間として一緒に来て頂きましたよ？」

その言葉に、で？と問い返したげな表情でよし乃は小首を傾げた。長い髪を後ろで一纏めにしたのを後方で結い上げている。その重そうな頭で誇らし気に小首を傾げた。ほつれ毛が淡く揺れた。

「貴女の目が見えないのは、こちらでバックアップします。でも本当は心眼で御覧になられているのではありませんか？この世を……オレはそう感じているのですがね？」

その言葉に、また面白い事を言うと言いたげに、

「フフフ……心眼なんてどこかのくだらない小説でも読んでくれたのですか？あり得ません事よ？」

楽し気にコロコロと笑っているが、泊には面白半分にそうしているに違い無いと思った。雅樹もそう思っていることだろう。

「貴女が、すでに修行を済ませ、師匠に認められ『神憑け』も済んでいる事を承知です。そして、今ではこの地に必要な数少ないイタコとして存在しなければならぬ者である事も重々承知はしておりますよ。でも、もっと大切な事も有るのです。それは、この前にここに来た時お話させて頂いた事に有るのですが。それでも納得出来ない……判らないと言つので有りましたならば、無理矢理にでも貴

女を仲間にする事になりますよ？切り札はこちらにありますから！」
雅樹は泊を見た。泊は雅樹の言う通り、術を行おうとした。すると、

「ふゝ。仕方ありませんね？無理矢理って言うのはあたいの意志に反しますわ。ならば賭けをしません事？」

よし乃は、いきなり神聖なこの場所で正座した脚で胡座をかき、その纏った白装束の袖を二の腕が見えるくらい迄引き上げると、胡座をかいたその脚の上に思いきり良く肘をつく。

「！」

雅樹と泊はその行動に驚きの表情を見せるしか出来なかった。よし乃の細く白い腕には綺麗な虎の入れ墨が彫られていたからである。それを目にし、圧倒されてしまった。

「この入れ墨。この虎を先に見つけた方が勝ちと言う事にしましょうか？勝ち……つまり貴方達が言う仲間になると言う事ですけども？」

よし乃は蔑んだかのように笑った。

「その虎は？」

「さてね。あたいが金の陰陽師であるとおっしゃった貴方なら分かるではありません事？」

意味ありげな笑いを口元に含ませて、よし乃はニヤリと微笑んだ。

「金……虎……」

雅樹は考え込んだ。すると隣から、

「白虎か！中国では五元素を確か金と言っているはずだからな！」

泊は自らの記憶に有る物を思い出した。だけど、

「白虎などどこにいると言うんだ！そんな想像上の生物など！」

雅樹は下らないと放棄しようと言葉に出す。

「下らないですって？まあ、失礼な事を言ってくれます事？」

突然よし乃は高笑いを始めた。そして、雅樹達の方に向き直り、
「このおかげあたいは、陰陽師としては生きて行けませんのよ？
目が見えない盲目のイタコとしては生きる事は出来ましても！」

危機迫るような怒りのオーラがよし乃の周りに満ちた。それを、男二人は見て取りグツと息を飲む。

蛇に睨まれた蛙でもあるかのようにだった。

「では、貴女は本当にいると……言っんですね？白虎が！」

雅樹は、氣迫に負けまいとして言葉を放つ。でないと、この場から立ち去らない限り息が出来ないと思ったからであつた。

「居ます。この日本の何処かに！白虎はあたいの半身……でもありますからね？」

今度は穏やかに、にっこりと笑った。雅樹はホツと息をつく事が出来た。そして何て計算高い女だろうと思った。泊よりも手が負えないでは無いかと、頭の中で独り眩く。こんな所で立ち止まってもいられないと言うのに……年下のこんな高校生くらいの女子に氣後れしないといけないとは……齒がみしたい気分だった。

「では捜し出した方につく。と言う事で良いんですね？約束出来ますか？」

雅樹は、この状況下それしか無いとそう思った。

「おい！本当に捜しに行くと言うのか？この女の言う事を信じると？」

泊は、それは考えものだと言わんばかりで、雅樹を制しようとしたが、

「ただし、条件があります。よし乃さん？貴女もオレ達に着いて来てもらう必要が有ります。その要求を受けてもらえなければ、今直ぐこの泊に術を行わせ、貴女を無理矢理に引き連れて行きます！」

雅樹は言い切った。泊は、火に油を注ぐような事を良く言い切つたなと感心していたが、

「考えたわね〜ふう〜良いわ。その要件受け入れるわ。誰かに操られるなんてイタコの仕事以外、真っ平ごめんだからねえ〜？」

言い終わると同時に、よし乃は再び身なりを整え正座をした。今迄の口論が嘘のように、しつとりと腰を下ろしている。

泊は、この女の度胸と威圧感が……今迄のやり取りが嘘のように

思えたが、この女の本音を聞いた気がした。誰しもが何かに捕われているのだという事を……

#3 東北へ

東北へ

朔夜達一行は、纏まった意見を二度確認した後、直ぐさまホテルのロビーを出た。そして、JR広島駅に辿り着く。この旅の為に決められた席順。一般車両だが、予め問題が起きないようにくじ引きで決められた席、それは次の様で有った。

朔夜と潤と籠の中に入れたミヤ（かえでが付けた白虎の名前）、叶と直紀、かえでと水城と言う取り合わせであった。何となしげに上手く席分け出来たのではなかるうかと、朔夜は思った。がしかし、そんな中、

「ほら、塚原。約束のものだ！」

直紀が自らのアタツシケースの中から一つの茶色の紙袋を手渡した。お土産かと飛びついた叶はその中身を嬉しそうに見てみると中身は冷め切ったさつま芋が三個人入っている。

「何やねんこれは！直紀！おんどれはなめとんのか！」

ワナワナと肩を震わせ怒りを露にしている叶に、

「約束だったであろう？俺は嘘をついてはいない。ただ、お前達と逢うのが遅かったのが悪いのだ！俺に非は無いぞ？」

本当は自分で食べようかとも思ったのだが、この待ち続けた時間の勿体無さを知らしめようと直紀は考え付いた。よって、直紀のリベンジは或る意味成功した訳である。

「食べもんを粗末にするなや！ばけ！かす！なんて可哀想なさつま芋なんや！こうなったら、オーブンレンジが無いから訊いて来る！」

叶の言葉が周りに響く。そしてバタバタ通路を駆け出していた。直紀はクククと勝ち誇って笑っている。そのやり取りを聞き、やはり間違えた席順だったかと横目で見ながら朔夜は苦笑いした。

朔夜の隣に座っている潤は、ミヤが入ったケージを抱えて大人し

く座っている。表情が少しだけ明るくなったかなと、潤の横顔を眺めながら朔夜は胸をなで下ろしていた。初めの自暴自棄な荒んだ表情はそこには無かったからである。

「なんじゃろ？」

朔夜の視線に気がついたのか？急に潤が顔を朔夜に向けてきた。

「いえ……何でも無いですよ？どうですか？こうやって新幹線に乗る気分は？」

朔夜は心の内を悟られまいと、話を切り出した。

「そうじゃな～何か違和感はあるけども。こんな鉄の固まりで移動出来ると言つのは……でもこれが今の世の常なんじゃろ？」

潤は頭の中に色々と浮かぶ事を整理がつかないと言った感じで語り出した。

「じゃけど、何となくわくわくするし面白いと思うんじゃ……上手くは言えんのじゃが……」

そして、はにかむようにニコリと笑った。

「そうですか。それならば良かったですよ」

朔夜も落ち着いた気分で微笑み返す。

自らよりも年が離れ過ぎているこの少年と普通に会話ができるのは有る意味不思議ではあったが、これが潤の持ち味なのだろう。きっと、今迄の長い時間が潤を育んで来た。人々に愛される性格を持ち合わせていたのであろう。とそう思わずにいられなかった。

「キヤーツ！このお菓子、水城にくれるの？」

朔夜の直ぐ後ろを占めている、女所帯の席は遠足にでも行くかのような華やかさで満ちていた。水城がお菓子好きだと言う事に気がついていたかえでは、買いだめでもするか勢いで荷物として買い込んでいたのである。

「良いよ～水城ちゃん好きでしょ？お菓子。ポテチとクッキーとチョコレートと……こんなに有るけど、どれが良い？」

「えっとね～水城は～」

ガサゴソと漁りはじめる水城に、かえではニコニコと微笑みなが

ら一緒になつてお菓子を選り始めていた。

「えーん。選べない」

「じゃあ、片っ端から開けよっか？」

かえでは、そう言うなり全てのお菓子を開けはじめる。そして、二人して摘みはじめた。暫くしてから、分け前を皆に配ろうと、

「ねえ、朔夜ちゃんと潤くんも食べる？」

直ぐ後ろから身を乗り出すかのようにして、顔を覗かせ、かえでが問い掛けて来た。

「え？お菓子ですか？」

朔夜は滅多にお菓子類を口にする事は無い。果物を口にする事は有るが……

「朔夜おじちゃんはお菓子嫌いな？」

畳み掛けるかのように、今度は水城が顔を覗かして来た。

「あはははは……では一つ頂きましょうか？和菓子の様なものがあれば嬉しいんですが……あ、潤君も食べますか？」

自分の事もさることながら、一応潤にも声を掛けるようにしようと思う。それが、良い人間関係の運びとなるのだから。そう朔夜は思っていた。

「和菓子ね、朔夜ちゃんはお茶受けが好きだものね？お煎餅買ってたかな？潤君は、チョコレートとか食べてみる？美味しいよ？」

ガサゴソ、買い溜めたお菓子類をかえではまさぐっていた。そんな時、

「あつ！何や美味しそうなものがあるやん！俺にも頂戴な！」

底抜けに明るい声が後方から聞こえて来た。言わずもがな、叶である。

「あんたにあげるようなもんは、一つも無いのよ！」

かえでは、ツンつと顔を背ける。

「酷いいわれ様やな、俺はこの可哀想なサツマ芋が食べれんで、悲しい思いをしとるんやで？それを……全ては直紀が悪いんや！あの男は食べ物は何やと思つとるんやろか！」

茶袋を驚掴みにして喚き散らしている叶。そこに通路を通ろうとしている、車内販売の女性が、困り顔で叶の前にいるのに気がつき、「塚原。お前、邪魔！」

直紀が、叶の腕を取って席に座らせる。車内販売の女性は少し困惑した表情で、各々に注文が無いか聞いた後、そそくさとその場のワゴンを転がして去って行った。

朔夜と潤は、日本茶。叶と直紀はコーヒーを、そして、かえでと水城はミックスジュースを頼んでいた。それは、和気あいあい？な旅の始まりであった。

#4 西へ

西へ

荷造りを弟子に任せ、よし乃は終に雅樹と泊について行く事になった、ここ恐山下。凍てつくような風は吹いて無く、穏やかな冬の一日の始まり。

昨日は、逆指定されて、苛立った。でも、こうなった限りは白虎なる物を捜し当てなくてはならない。分かってはいる。ならば早くそうしなければと思っていたが、突然の事の成りゆきに、肝心のよし乃の支度が出来て無かった。ので、一日あの小屋に泊めてもらい、支度が済んだ今朝、出発となった。

しかし、よし乃の姿は流石にイタコとしての服装ではまずいと判断し、雅樹自ら持っている男物の皮ジャンとセーターとジーパンを貸した。丈が少し長い、よし乃が普通の女性よりスリリとしているが、大きな体つきをしている為みつともない着こなしにはならなかった。そう、男性の着こなしがある意味一段と色っぽさが増した感じに見受けられる。こう言う事になったのは、肝心のよし乃が、一切私服を持ち合わせていなかったからであった。

山下からタクシーを拾い、最寄りの駅で電車に乗る。今度は当て所も無い旅となった。雅樹は依然とイライラとした感情を引きずっていた。身柄は確保出来たものの、白虎捜しなんて大いに荷が重かった。まるで竹取物語の一説である、男達に自分が重なって感じられたからであった。無理難題を押し付けて、自分は安全地帯に逃げ込んでる調子の良いかぐや姫。その求婚者の一人では無かるうか？悶々とした感情が渦巻いてた時、

「よし乃さんのその入れ墨は、目が見えないのにどうやって彫ったんじゃない？」

突然泊は不思議に思ったのか……よし乃自身に訊き始めたのであ

る。

そう言えばその通りである。盲目の彼女が、虎と言う事をどうやって知り得たのか？それに、虎を彫るように言ったのか？だとしたら、また何故？

「あたいは生まれつき目が見えなかった訳じゃありませんよ？中学生になった時に視力が低下したんですの。もともとイタコの才は持っていたのですが……まさかこんなに完全に見えなくなるとは思ってはいませんでしたか？」

よし乃は、余り過去の事を語りたくは無さそうだったが、訊かれた事に正直に答えた。が、意味ありげな笑みを携えていた物であるから、どこ迄本当の事を語っているのかは半信半疑に思える。

「自らの宿命に従う……なんて、余り気持ち良く無いでしょ？入れ墨にしてしまおうかな？なんて少し反抗してみたり……」

「宿命？イタコと言う職に就くって事がか？」

泊は、少しだけ同情した。宿命、運命なんて物に縛られて生きて来た自らを思い出したからである。

「……二の腕にあったのは……本当は痣だったんですわ。虎模様の痣。小学校時代、半袖を着る事が嫌でしたわね。チラチラと覗かれる癒が不気味に感じられたし、目につく所にあるものだから、不審げに尋ねる者もいれば、見て見ぬ振りをする者も居たから余計にね。」

イタコになった事には触れないで話を続ける。まるで独り言を言っているかのように。

「あの頃は女としての意地で長袖を着る事にしたものですわ？完全に目が見えなくなった頃には、いまいまいから入れ墨で誤魔化す為に彫ってもらったし。痣よりはマシかなって思えましたもの……それに……イタコとして生活すれば、彫り物が見える事もありませんし？」

ツラツラとよし乃は語り始める。しかし、イタコは、朝夕水垢みずこ離もして修行をするはず。その時は、周りを気にしないのか？あ、

イタコのほとんどは盲目なんだったか……話を聞きながら泊は考えを巡らせた。雅樹にはその修行の事など眼中には無い。だから何も訊く必要性は無いと判断し、口を挟む事は無かった。

「でも、痣があったからって、それが白虎とどう繋がるのだ？ 儂には理解が出来ん」

それもそうであつた。よし乃は何故、陰陽師としての自分を知り得たのか？ 白虎が関係していると分かつたのか？ 話を聞いている限り、中学校に普通に上がって凡人として生きていたはずである。なのに、何故？

「夢のお告げと言うのは、摩訶不思議な物ですわね。あたいとしても、その辺りは信じれなかったけれど、信じるしか無い事象と言う物もあるのですから」

「信じるしか無い事象？」

泊は問い返した。彼女は一体どんな夢を見たと言うのであろうか？ 次第によし乃の話に聴き入っている自分を感じ始めていた。

「夢は、神からのお告げなのかも知れませんが。そう感じた事ありませんか？」

興味無く聞き流していたハズの雅樹であつたが、この言葉にだけは反応した。以前、自ら行った事と重ね合わせたからであつた。

朔夜、叶と初めて一戦を交えたあの事。

自らが神のように夢を操り、そして、人の心に囁き掛けた悪意。

それは自らが持ちかけた最善の策だつた。

夢とは、未だ科学的に解明されていない物である。だから、人の心を自在に操る事ができる強力なエキス。だからこそ、そこにつけ込んで事件を起した。実際、人はその事に魅入り、そして、事件は起きた。

「視力を無くして行く、あたいの眼に焼き付いた最後の映像は、夢でしたわ。今でも見続ける事が出来る、唯一の夢。それが、あたいの出発点でもあり、全てなのかも知れません」

「一体どんな夢を見た？」

泊は、出し惜しみしているその事柄を問いただした。

それを誇らしくそして、自慢げにしながらよし乃は軽く笑った。

「一匹の大きな白い虎が言うのです。動物の声を聴く事は今迄も普通でありはしましたが、この時だけは別でしたわね。語りかけると言うよりは、身体の中から坤きあげる声のようで……そして、言うのです。『視力を失う代償として、俺がお前に憑く』と。『そうすれば、五行の陰陽師とし生き長らえる事は出来る。その代わり、イタコとして今は生きる。そして、捜し出せ。我が半身を！』夢から醒めたあたいの眼には何も映らなかった。だけど判った事は有りますわね。より先を指す為には、白虎を捜し出すと言う事なのだ」と夢の通り、視力を失った。そしてイタコになり、今この時点で白虎捜しが始まった。と言う訳であった。

皮肉なことだ。もし自分がそう言う一生を送っていたならば、一体どうであろうか？泊は、考えただけでもゾツとする。

眼が見えないと言う事事態お先真つ暗な感じだろう。それを、イタコとして今迄生きて来たのかと思うと、若いのに気の毒だなと思うしかない。まだ自分の方がマシだと思える。そう、人は上を見るか？下を見るか？そうやって自分の今いる地点をはかる。物差はその辺りにしか無い。比べてどうだ？それしか無いのだ。

「……で、全く当てが無いのか？」

雅樹は、一部興味を持ったのか？それとも、少しでもこの状況下を打開したいのか？泊りには判らなかったが問い始めた雅樹を見遣った。

「当て？西ですわね。白虎とは西の守護神で有りましょ？あたいは青森から外に出た事の無い身……学校で習った地理でしか、名前を見知る物は無い。ですわね？」

よし乃は、それだけ言うと、黙り込んだ。もしかしたら、見えな
い闇の先にその場所は判るのでは無かるうか？泊はそんな事を思っ
た。

「西か……ならば、東京から西を指すか……」

雅樹は、一瞬考えが鈍ったのか、言葉を詰まらせて小さく言葉を
発した。一先ず本拠地東京に舞い戻らなければと。

#5 ステップ

ステップ

樹達が、白虎捜しで青森空港から東京に向わんとしている頃、朔夜達一行は広島駅を出て大阪に辿り着こうと言う頃であった。

大阪……ここは叶の生まれ育った土地。何事も無くいつも流されているであろう、駅のアナウンスが聞こえて来る。朔夜はちよつと気になり叶が座っているシートの方を見た。叶にしてみれば、この土地から始まった五行捜しの旅。朔夜自らもこの土地に足を向けた直紀と共に。

一体この五行捜しの結末は？意味ありげな謎の怪文書…予言。それは何を告げたいのであろうか？時々思う。この旅の先、本当にこの日本を巻き込むような事象が巻き起こってしまうのか？ならば、集まる以前に放っておいた方が良かったのではなからうか？集合する危険性。それがもたらす先……広島で出逢ったハーム。そして夢に現れたハームもこれからの事を何かしら言いたげであった。『今は休め』と言う事は、この先何か重大な事が起こる前触れに対処するように…とのことなのかも知れない。色々考えが巡る。

雅樹より先に仲間捜しをして、これを阻む。そうする事が良策だと考えたからこそ、今、皆はこの場所にいる。分かっているけど、今自分が造り出している影から手が伸びて来て、引きずり込まれそうな印象を、感じずにはいられない。何も案ずる事の無い平和に落ち着いたこの明るい今の状況下。だからこそ、よけいに不安になる。

「どうしたの、朔夜ちゃん？」

背後に座っているかえだが、物思いに耽っている朔夜に声を掛けて来た。

「え？」

自らが静かである事は、性格上判り切っているだろうに……かえではそれでも問いただして来た。

「だって、上の空って感じだもんね？」

今度は、水城が声を掛けて来る。小柄だから靴を脱いでシートに乗っかって身を乗り出すようにしていた。ちょうど潤の頭の上に顔を覗かせている形である。

「潤君？朔夜ちゃんとお話でもしたら？」

「え？」

ちよつと困った顔をしている潤にかえでは今度は話を振り始めた。余りにも静かな面々がここに居座っているのが可笑しいとも言いたげである。確かに。だけどこれが一番居心地が良いスタイルだ。それに反して、叶と直紀の席は賑やかである。あれは、叶の場合、暇があれば何でも話をしたがる性格だから致し方ない。読書に勤んでいる直紀を道連れにしている。

高校時代からそうだった。あの二人は或る意味ボケと突っ込みを演じていた。

もちろん、叶がボケ役。直紀が突っ込み。で、自らはそれをサボートする仲介役。その場所に位置しているのが一番自然だった。なんて昔の事を思い出して朔夜はクスリと笑った。

「僕達はこのままで良いんですよ？かえでちゃん」

「そうじゃとも。このままで良いんじゃない」

朔夜と潤は顔を見合わせて笑った。

それに対してかえでと水城は顔を見合わせて不思議そうに小首を傾げた。それは、それで楽しいのかとでも言いたげな表情だった。

そう、かえでと水城もワイワイ遠足にでも来ているかのように騒いでいた。で、前二人が静かなのが疑問で仕方なかったたのである。女の子にしてみればこの男達の様子が不思議で堪らないのだろう。

「せっかくの旅行だよ？もっと楽しく行こうよ！」

不満だったのだろうか？かえではヤケに要求して来る。

「旅は何の為にしているんじゃないか？」

潤は逆に問い返していた。まるで、問答のようである。別に陰悪になるような問い返しでは無いけれど、聞く人によったらこの言葉

は邪険に聞こえるかも知れない。だから、

「かえでちゃん？旅行は色んな楽しみ方が有る物だと思われますよ？人それぞれではいけませんか？」

朔夜はやっぱりと話を切り出した。これで分かってもえたら有りがたい。

「うん。確かにそうだね？」

かえでは少し考えてから、そう言った。取り合わせがそうになってしまったんだと思う事にしたのだろう。静かにその場を引いた。その様子を見て、水城も元のようにシートに着く。

暫くしたら二人の笑い声が聴こえて来た。別段気を悪くした様子は無い。流石のかえでも、余計な押し売りはこの二人には必要は無いんだと理解したみたいだった。

朔夜は、ふと横に座っている潤を見た。外の風景を楽しんでいる様であった。それもそうだろう。こんな風に外の風景を見る事で、眼に映る物から、今の日本がどうなっているのか実感出来るのだから。

それを確認した朔夜は、徐に今度は自ら持つて来ていたノートパソコンを開いた。そして、自分宛に届いてないか？いつも日課にしているメールの確認を始めたのであった。

その頃には、叶と直紀達も落ち着いて、自分達の時間を過ごし始めていた。直樹は読書。そして、叶は、あれだけ爆睡したにも係わらず、シートに頭を寄せて眠りに入っていた。

#6 光と影（前編）

光と影（前編）

「よし乃！今日はそのくらいにしとかないか？」

少し甲高い少年の声が教室中に響いた。

「もうちよつと！あたいの気がまだ済まない！」

部活動の美術室。皆もう帰宅して、よし乃と慶太しかここにはもういなかった。窓の外はもう夕暮れで真っ赤な夕陽は既に沈んでいた。蛍光灯の光が鈍くこの部屋を照らしている。

「慶太はもう帰ったって良いんだよ？あたいはまだコノ作品を仕上げてしまいたいんだから」

熱心に取り組んでいるのは、文化祭用の油絵。南の島を連想させる抽象的な、そして青を貴重としたダイナミックであり且つ所々繊細な筆運びが印象的な絵。

「まだやって行く気かよ……んじゃ俺も残ってやる！お前独り残していけっかよ！」

「その心配性どうにかした方が宜しくてよ？」

熱心にキャンバスに向っているよし乃は、クスクスと笑っている。慶太は、よし乃の同い年の幼馴染み。視力がおぼつかないよし乃のことをいつも心配し、登下校を共にしている仲睦ましい二人だった。もちろん、この部活に入ったのもよし乃が望んだからであつた。

よし乃は眼鏡を掛けたとしても見えない、低下してしまった視力ではもう描く事が出来ない風景を、今は抽象画として表現する事に夢中になっている。

そうする事で、今の自分を表現したかった。そして、この目が見え無くなった時の為に、こうして何かを残しておきたかったのである。

慶太はそのよし乃の気持ちを重ね承知していた。

だから、そのことにいつも付き合った。

慶太は、よし乃に甘くも切ない恋心という物を抱いている。見かけだけでは無い心の強さ。何事にも積極的に。そして、前向きなこのよし乃に魅了されていた。でもそれは、儚い気持ちである。慶太の実らぬ恋心。

よし乃の眼が見えなくなる。それはもう時との戦いであつた。そして、慶太にはイタコとしての道を歩んで行くよし乃のその姿が、背中合わせで取り組んでいるこの作業の中、よし乃の背中に幻として見えていた。

そして、いつも寂しくなる。何故、神様はよし乃にこんな運命を背負わせたのか？何故自分をよし乃の幼馴染みとして出逢わせたのか？光り輝くこの世界を、そして、暗闇を一度に背負わせているのか？

再び、麗太は自らの作品を仕上げようと、筆を取る。不思議なもので、こうやって二人しかいない美術室は静まり返っていても、肌を寄せあつて過ごしているような感覚を覚えてしまう。そのくらい心地が良いものだった。

あれからどのくらい時間が過ぎただろう？慶太は肩を叩かれてハッとして熱中してしまつた作品から筆を置いた。

「終わったわ。もう帰りましょう？」

よし乃のキャンバスに描かれたその絵は、戦いの裏に隠された平和をイメージさせるような印象を与える素晴らしくも熱意籠つたものであつた。

「何突つ立っているの？」

よし乃は、自らのキャンバスの前で立ち尽くしている慶太を訝しく振り返つた。

「うっん。なんでも無い。オレ、この絵好きだぜ？良い絵だよな。」

慶太は、袖口でこぼれ落ちて来る塩辛いだらう涙をぬぐい取つた。

「そう？ありがとう」

慶太の姿も今こぼれ落ちている涙も、よし乃の瞳には映って無いのである。それはとても悲しい事だけど、今の慶太には有り難い事だった。こんな自分を見られてしまったら、今直ぐにでもこの美術室から……よし乃から逃げ出さなければならぬほど、恥ずかしい事に思われたから。

「うん。大好きさ！じゃあ、帰ろうか！」

荷物を片付け慶太とよし乃はすっかり暗くなったこの学校を後にした。

「良いなあ、修学旅行！」

文化祭も無事終わり、このよし乃達の学校は修学旅行と言うイベントを迎えようとしていた。

しかし、よし乃は修学旅行に行く事は出来ない。文化祭の時より低下してしまった視力はもう限界だった。両親も既に、学校に行かす事を諦めてしまい、イタコとして生活するように話を進め始めていた。今は、こうやってよし乃の家を訪ねれば済む事だが、それも後幾日であろう？慶太は自らから離れて行くよし乃を思い虚しさに似た落胆を感じていた。

学校での出来事。それを報告するのが日課であるのにそれさえも出来なくなる。せめて、この修学旅行が終わって帰って来てその報告ができれば……それさえも儚い夢かも知れない。

「小学校の時は、熱出して行けなかったものね。あたい……旅行らしい事なんて一度もしなかったわ。あ、ごめん……余裕が無いのね。こんな愚痴零してしまうなんて」

これは、よし乃の最後の本音かも知れない。よし乃は旅と言うモノを知らない。この青森から出る事等無かったのだから。

「旅行帰って来たら教えてね？あ、お土産も期待してるからね！」

よし乃は見えないドアの外へと吸い込まれていく光の中の慶太の後姿を思い、そして笑顔で見送ったのである。

#7 初夢

初夢？

「よし乃！」

叶は、勢い良くそんな自らが知りもしない名前を呼んでガバツと目を醒ました。隣に座っている直紀が滅多に見せない驚きの表情で、叶を覗き込んでいた。

「何だ？お前……寝ぼけているのか？」

叶は、今までのビジョンが余りにもリアルで、こんな感覚を味わったことが無くて、額に伝う汗を感じながらそれを拭った。

「なんやったんや？今のは……」

叶は、訳が判らなくて、頭の中が混乱した。まるで、誰かの意識の中を覗いたかのような感覚。それも、こんな事は今まで無かつたし、ましてや、映像を確認した睡眠という物を味わったことが無かつた。

真っ青な表情の叶に、駆け寄ったのは朔夜であつた。

「どうしたのですか？叶……顔色が真っ青ですよ？」

はす向かいの、後ろの席に座っているはずの朔夜までこの席まで来て、顔色を窺っていた。

「頭の中に、ビジョンが……これって、もしかして『夢』……なんやろか？」

叶は、混乱する頭を何とか整理しながら言った。何なのや？この感覚は……

「叶……？夢を見たのですか？」

朔夜は、今迄見たことの無いと言っていた叶が、夢を見たかも知れないというその事象を不気味に思っていた。

何かが起こりつつあるとでも言うのか？均衡が崩れ始めている気がする。そして、はっと気がついた叶は、

「此処は、今どの辺りや？さっき大阪を出たところまでは覚えとるん

やが？」

頭の整理を終えることなく叶は問いかけた。その答えは、直紀が出した。

「京都を過ぎたところだ……」

京都を過ぎた。と言う事は、もしかしたら京都で、あのビジョンを見たことになる。やはり、何か繋がりがあるとしか考えられない。「なぐに？よ・し・乃・つて！」

こんな非常事態に、今まで水城と戯れていたはずのかえでまでもがこの席に押し寄せてきた。もう通路は朔夜とかえでの二人で塞がれている状態である。

「女の子の夢でも、見てたの？」

続けざま、かえでは横目で睨むように言った。まるで嫉妬でもしているかのように感じられるのは、朔夜の私見である。

でも、問題はそんなところでは無い。

「かえでちゃん。ここは通路なのです？席に戻ってもらえませんか？」

自分はさておきそんな事を言った。かえでは後方からやってくる家族連れのお客に気が付き、一瞬「すみません」という表情を見せたが、その顔は引き攣っている様でもある。そして、ブツブツ何か呟きながら、席に戻った。

「城戸君？申し訳ないのですが、僕と席を代わっていただけませんか？」

朔夜の訳ありの表情を読み取り、無表情ながら、

「判った」

と了承し、席を代わった。直紀は頭の中で、叶の状況を察した。確か……夢を見ない者が夢を見る。事に関して予言が有ったのかないとか？そんな事を朔夜が言っていた事を思い出したからでも有った。直紀もまた、不思議な現象に、この二人が絡んでいることを察知し、そして、静かに自分の頭の中のデータを纏めることにしたのである。

「叶？で、どんな夢を見たのですか？」

その答えに、

「俺、男の子やったんや……」

「それは当たり前！」

朔夜は何を言い出すかと思って、思わず嘖き出した。

「何で笑うんや！」

「いえ、いえ、続けて下さい」

ちよつと腑垂れた叶だったが、続けてこう言った。

「女の子に、慶太って呼ばれとった。女の子は、よし乃って言う名前
前で、眼が見えない子やってん」

「眼が見えない？」

「そうや」

まるで、自分の現実世界をこの二人を通じて垣間見てしまったか
のような感じだった。そう、同調？そんな感じであると、叶は言っ
た。

「この旅の、最終目的地は京都。そして、初めて見た夢がそれです
か……」

朔夜は、内容より現実味のあるその夢の構造を話し始める。

「もしかしたら、雅樹達はもう最後の五行を仲間にしてしまったの
かも知れませんか？」

朔夜はそう言った。しかし、叶の中では仲間になった合図的なも
のは感じられてない。点と点を結ぶ線を確認できていなかったため
である。

「いや、それは無いわ」

と、朔夜に告げた。

「じゃあ、どうしてなのでしょう？」

不可解すぎる。もっと、叶が五行を見つけるのに長けていたらこ
のことがハッキリするのにと、実際、口惜しく思う。でも、それは
言っても仕方が無い事だ。

「すまん……はつきり言って、俺は良く判らん。只でさえこんな
に混乱しとる。役立たずや……」

叶のこんな真面目にしょげている表情を見るのは初めてではな
かるつか？と朔夜は思ったが、それを励ます言葉が見つからない。
結局、他人である。自分では無いのだと知らしめられた気がして、
余計に朔夜は苛立つてしまった。

「この後、どうしますか？このまま東北方面へと移動しますか？」
話を摩り替える。そうしないと、前に進めない気がしたからだ。

「そうやな。俺には五行が雅樹と仲間になつとらんとと思う。引き返
しても仕方が無い気がするわ。それに……正直、京都に行きたくは
無いんや……」

これは、叶の正直な気持ちなのであろう。だから、朔夜は、「判
りましたよ。叶に一任します」

とその場を後にし、そして直紀と席を代わった。

叶は、頭の中を駆け巡るあのビジョンで目が回りそうだった。あ
れが『夢』なのか……現実、そして、夢。

人は夢を見る。それを初めて体験して、違和感を覚えた。現実か
？夢か？それが判らない範囲。まるで、映画を見ているかのような
感覚。でも、余りにもリアルで……自分では無いのにまるで自分で
あるかのような夢。

朔夜達はこんな物を毎日見ているのか？気が変にならないのか？
そう思つて、また、ボーっとする。

「塚原？お前……」

直紀は、席に着きそして、気になっていた叶に話しかけようとし
た。しかし、叶が再び眠りに誘われているので、それ以上言葉を掛
けることができなかった。本当は、心配なのだが、でも、直紀には
どうしてやることも出来やしない。ただ、見守つて、自分がすべき
事だけを見つけないとそう思ったのである。

8 東京

東京

その頃の雅樹達一行は、羽田で飛行機を降り、そして、浜松までモノレールを使い品川まで出た。そして、今度は品川から新幹線に乗り込むと、当てのない西へと目指すこととなる。

「やけに人が多いの、これが日本の首都圏か？」

泊は今までこんなに人を見たことが無いため、思わず出た言葉であつた。

「それでも、人は少ない方ですよ？」

雅樹は、平然とそう言つてのけた。

「空気がよんどるし、良い環境とは言えんのう」

確かに、北の果て。択捉島で育つた泊としてはそう思うだろう。

しかし、雅樹にはこれが普通である。逆にじっくり来るのだ。繁栄と腐敗の街東京。それが心地良い。

「あたいには、その様子が見えないのですが？でも、息苦しいですね」

とはよし乃の言葉。そうだろう。恐山の聖域に居た彼女には感じるはず。泊は思った。自分とそう変わらない自然と触れ合っているよし乃。だけど、

「こういったのも、良いものですわね？」

などと言い始める。

「人と触れ合うのには好都合ですわ」

そうかも知れないが……意外な一面があるなと思う。排他的なイメージを彼女に抱いていたから。

旅はこれから始まる。新幹線の中、三人は座席を互いに向け合いそして座つた。

雅樹は何を考えているのか？また、胸元のポケットを握り締める

かのようにしている。

よし乃は真っ直ぐ前を見ている。それが、泊に向けられていたから、一瞬ドキリとしてしまった。眼が見えないのは知ってはいるのだが、気にならないなんて事はやはり無い。そして、まるで一瞬心の中を見透かされてるような気分になり思わず目をそらした。どうも苦手かも知れないなと思った。

その後、三人とも何も話さなかった。ジッと黙ったままだった。これが旅の始まりであり、過酷な使命の下に生まれた者達の序章でもあった。

#9 光と影（中編）

光と影（後編）

修学旅行は、広島だと慶太から聞かされていた。

広島の、宮島にも足を運ぶらしい。

よし乃は、お土産を期待しつつただ待つことにした。広島と言えば、やはりもみじ饅頭だろうな？何て事を思いながら、クスリと笑う。慶太の事だから、判りやすい物を選んでくるに違いない。そんな事を考えて、また今の自分と向き合う。

もう、自分は俗世の人間に戻る事は出来ない。これからはイタコとしての生活が全てになる。自らの師匠も決まっっていて、通いで修行に励み始めていた。

だけど、この位の楽しみを抱いていても許してもらえらるうと信じたかった。

イタコとして一人前になるには、まず、師匠の身の回りの世話をするのが基本である。家事や、炊事。これらを経て、祭文・経文・祝詞・呪文・真言の暗誦を習得していくことになる。これらは、様々な巫術や祈祷の際に唱える大切なもので、一句も違える事は出来ない。

殆ど目が見えないよし乃にとっては、きつい事ではあるが、周りの修行者たちも、殆ど同じハンデを背負っている訳だ。だから、文句などは言えやしない。判ってはいるけれど、辛い事は確かだった。そう、盲目であるからこそ、これらを口移しで殆ど覚えなければならぬのであるのだから。

だから、こういった修行がきつくて堪らないイタコ志願の者達は、直ぐに、山を降りる。

しかし、よし乃は違った。自分にはこれしかないのだ。とそう判っていたから、諦める事も、断念する事もなく、師匠に食らいついた。そして、元来の才能という物がよし乃にはあったので、辛くと

も、逆にそれをバネに出来たのではなかつかうかと思う。

そして、暗誦させられる経文。まずは、般若心経であった。これは一般的なものであり、誰もが身につけている物であった。よし乃は、耳は良いし、覚える早さも人一番早い。だから、異例な早さでこれを覚えてしまった。

その他に覚えなければならぬのは、仏説地神經、地藏和讃、錫丈經、高天原や、大袈の祝詞である。また、八卦や祈祷などの技法も徐々に覚えていかなければならない。

でも、これらを覚えたからといって、仏おろし通称、死霊の口寄せが出来るかと言われると出来るわけでは無い。これらは修行中に教えられるものではなく、神憑けを終えて、自ら身に付くものであるとされているのである。だから、イタコの道は非常に険しい。神憑けが何時の事になるのか？まだ判らないよし乃にとっては、それこそ、試練はまだまだ先にあるのである。

そんな、師匠の下に親に見送られながら通い続けているある日の出来事であった。

突然電話が鳴った。そして、そんな時にテレビの音声が入った。それは、今思えば警鐘だったかの様であった。

一週間という修学旅行にしては長い日取りの中のスケジュールの慶太たちを乗せたバスが、トラックとぶつかって高架下に落ちたという夕方のニュースが耳に入ったのである。

確かに、学校の名前は同じである。青森の自分の通っていたはずの学校。そして胸騒ぎがしていた時、

「よし乃ちゃん！大変なことになったわ！お母さん、慶太君のおうちに行ってくるわね！」

今さっき電話を受けた母が、よし乃に残して慶太の家へと何が大変なのかも告げず飛び出していった。

母と、慶太のお母さんは幼馴染であって、慶太とよし乃も偶然に同じく幼馴染である。それもあって、両家の家の絆も大きい。きっと、今の電話が、慶太に何か有ったかも知れないとの報告だったの

かも知れない。

よし乃は、いてもたっても居られなくて、見えない眼で居間をウロウロと手探りで歩き回った。ジツとなどしていられない。慶太が無事で居てくれますように！と心が騒ぐ。こんな気持ちは生まれて初めてであった。

よし乃は、産まれてこの方誰かの死をこの身で実感などしたことがなかった。父も母も、祖父祖母、叔父叔母。家系が、元気で今を生きている。

だから、

「よし乃ちゃん？よく聴いて。慶太君が亡くなったわ……天に召されたのよ……」

そう、母が慶太のお母さんのお宅から帰って来て言った言葉は、余りにも実感がなくて理解など出来なかった。

「慶太が……どうしたって？」

訊き返す。が、母は、もう何も言えないといった表情で、キッチンのテーブルに腰を掛けてうつ伏していた。目にはつきりとは見えないけど、そう感じた。母は泣いているのだと。

「嘘よ！慶太はお土産持つて帰って来てくれるって、そういってたわ！お母さん、冗談はやめてよ！」

でも何も言い返しては来ない。小さくぐもった嗚咽だけが聴こえた。

「お母さん……？お母さん？お母さん！」

何度も呼びかけた。でも聴こえてくるのは、湿った泣き声だった。

「いや……！！」

こうして、よし乃は初めて慶太の死を受け入れたのである。

通夜は、遺体を確認して、連れ帰ってから行われた。

それまでの間、母に変わって父がよし乃の修行のための送り迎えをし、よし乃は師匠の世話をした。

何のために生きているのか判らなかった。

「これであたいは、幸せなのだろうか？」

自分に問いかけた。

生と死。それはこの世の理。

そして、自分は、かけがえの無い人を一人亡くした。

イタコは、死人の霊を憑依させることが出来る人物。そんな者になつて幸せなのか？ここに至つて初めて疑問が生まれた。

これしかないから、この道を選んだ。他にも道はあつたはず。盲学校に行けば済むことだ。でも、自分は敢えて可能性のある物を選んだ。しかし、これが正しいのか？疑問が生まれて、まともに修行など出来やしない。

師匠も、かなり厳しく接してきた。余りにもやる気や覇気が無い自分に気がついたからだろうと思う。

もう、この場所に居たくは無かつた。

眼が見えない自分の生を呪つた。何もかもが呪わしい気分陥つてしまつたのである。

多分これが、自分の中で最初にして最後の反抗期だつたのではないだろうか？と自覚し覚えている。

通夜は一週間後に行われた。

色々手続きや、周りの目が有つた為に、この通夜は長引いた。

「よし乃ちゃん。通夜に行くわよ。準備は良い？」

夜、母が自室に訪れて、そう言つた。

「準備なんて要らないわ。あたいが居れば済むことでしょ？」

半ば自棄だつた。未だ神憑けも出来ない修行イタコ志望の自分が出向けば、周りは落ち着くことだろう。でも、あたいは、何も出来はしない。ただ居るだけの存在ではないか？

ただの、見世物じゃ無いかとさえ思えてくるくらい、今の自分はどうしようもなく荒れていた。

でも、それは、慶太のせいではない。事故を起こした、その方にある。何故こんなにイラつくのだろうか？その気持ちを慶太にぶつけ

てみたくてしょうがない気分で、家を出たのである。

参列者は、学校関係者、マスコミも含めて大々的に行われているみたいだった。

あの事故で、亡くなった同級生は他に五人居たらしい。でも、一人がこれだと、明日の告別式はどうなるのであるのか？皮肉にもそんな事を考えてしまった。

そして、あたいは母に導かれて、中に入った。

狭い部屋に大勢入っているようだった。人々の声がステレオのようにあちらからこちらから脳を刺激する。煩くて堪らなかった。でも、あたしはここに居なくてはならない。判ってる。でも、我慢が出来るかどうかは判らない状態だった。

「よし乃ちゃん。来てくれたのね？」

落ち込んでるはずの、慶太のお母さんが、あたいの所に来て、頭を撫でてくれた。こんな気持ちなのに、優しくしてくれる謂れは無いんだけど。と思ったけど、顔には出さずに置いた。

「よし乃ちゃんに、渡したいものが有ったのよ。これなんだけどね？」

おばさんが、あたいの手を取って握らせてくれたのは、四角い箱だった。

「それとこれ……」

なにやら封筒のような物のように感じる。手触りでそう感じた。

「慶太が、修学旅行のお土産に買ったみたいなの。運よくバッグの中に納まったから、良かったわ。それを開けてみたら、よし乃ちゃん宛ての手紙が入ってたの。帰ってきたら渡したかったのだと思うわ……」

その言葉を聴いて、何か頭の中ではじたような感じがした。あたし宛の手紙……慶太は大事にちゃんと覚えてくれていて、そして無事届けるつもりでいてくれたんだと気付き、居てもたってもいられなくて、母に読んで欲しいと言った。

すると、母はゆつくりとそれを手に取り、あたしをここでは無い別の場所に促してくれた。

『よし乃へ

元気に、修行頑張ってるか？

こっちは、広島原爆ドームやら広島球場やら巡って楽しくやってるぜ？本当は、絵葉書でも思ったんだけど、お前の事考えると見えないものを見せようとするのって酷かなって思ったんだ。（つて、本当は、住所を控えてくるのを忘れたんだけど……）』

ここで思わず噴き出してしまった。慶太のそそかしい所が目に見えてしまった気がした。

『それで、お土産何にしようかな？と思って、考えたんだけど。やっぱりオレなりに気を遣って食べる物にしたんだ。広島と言ったら、もみじ饅頭だろ？あ、牡蛎もそうなんだけどさ、生ものだから腐ると困ると思って、やっぱり無難なところ選んじやったよ。と言う感じで、オレ達は、開放感に溢れて旅してます。帰ったら、もっと詳しく話したい事伝えたい事があるから、修行の邪魔にならない程度だったら、時間ある？オレ楽しみにしてるからな！んじゃ、また改めて！

慶太』

「バカ！帰ってきて無いじゃない！」

あたいの第一声はこれだった。

帰ってきて欲しかったんだって今初めて判って、何も映らない目から涙が零れた。次から次へと流れ落ちてくる。それを止めることが出来なくて、袖でゴシゴシと拭き取るしか出来なかった。情けない。こんな自分がいたなんて思いもしなかった。気丈で、逞しい自分のイメージをここで潰してしまった気がした。それも悔しい。けど、自分が慶太の事を好きでいたことに気がつかなかった、その事にも腹が立った。自分に腹が立つてるんだと気付いたら、また涙が

出てくる。

「よし乃ちゃん？そろそろ……」

母は、あたいのこんな姿をどう思ってみてるんだろう？今まで見せた事の無い自分の姿。こんなに泣いたことなんて無いだろうに……
「まるで、赤ん坊の頃のよし乃ちゃんの様よ？そろそろ、帰らないと。明日、また修行が有るのでしよう？慶太君も、こう言って手紙をしたためてくれたのだから、貴方も頑張らなきゃね？」

母は、最近のあたいの様子をちゃんと見ていてくれてたのだろうか？あんなにバタバタしていたのに……そう思うと、あたいは、

「おばさん。ありがと……あたい頑張るから！告別式出れないけど、絶対、慶太の事忘れないから！」

心の底からそう言い切った。

こうして、自分の中のモヤモヤした感情を洗い流して、やっと自分の歩んでる道を再確認した。

「あたいは、不幸な身の上なんかじゃ無いわ！」

と、帰りの道すがら、母に宣言するかのように、言い残した。

それから、自分の道。死霊の口寄せ（仏おろし）を出来るまで諦めないことを誓った。その最初の人物は、慶太。

話したかったこと。伝えたかったこと。それらを聴きたかった。

イタコは、死霊の魂を自分自身に降ろすことも、第三者に降ろすことも可能なわけである。それが出来るまでは、修行を怠る気は無かった。

「母さん。あたい、修行は通いじゃなくて、師匠の所に住み込みでやりたいんだけど」

そう言ったのは、告別式が終わってから三日後であった。

真剣に取り組みたかった。もう、何も失う物が無いと判断したからである。きっと、慶太以外、好きになる人はいないだろうし。そ

れに、この道を歩めば、きっと慶太にも会える気がしたから。

「よし乃ちゃんがそう決めたのなら、私は反対することは無いわ？ お父さんはどう？」

母は父に話を振った。

「良いだろう。一人娘を手放すのは寂しいが、それで、お前が納得できるのであれば、父さんは何も言わない」

ちよつと、悲しげな声でそう言った。だけど、あたいは自分で決めたこの道を、歩むつもりだった。それが、自分のためであり、父や母の手を煩わせることの無い一番のことである。だから、

「お父さん、お母さん。今までお世話になりました。よし乃は、頑張つてイタコ修行に勤めます」

畳に手をつき、今までお世話になった事を詫び、そして、感謝した。

その次の日から、あたいの新しい門出が始まったのである。

「一年ですね。よし乃さん？」

そう、あたいがこの修行を初めて丁度一年が経った。

師匠は、まるで永いことここに居座っているかのごとく、あたいを見ていた。でも、未だ一年だ。

「私は、あなたがもう、ここを出て行っても言いと判断しております。貴方は飲み込みが早い。そして、努力家でした」

一年という短い歳月で、ここを去っていいと言う事は、稀なことである。普通、二年から四年掛かるものだと聴かされていた。

「師匠？あたいは、本当にこれで大丈夫のですか？まだまだ、勉強することが有るのでは無いのですか？」

その問いに、

「いいえ。もう、あなたは独り立ちできます。ただ心配なのは、その歳で、独り立ちできるかと言う事です……」

ああ、そう言うことなのかと判断した。つまり師匠は、独り立ちをさせたくても、年齢が心配なのだと言う事。

「判りました。そう言うことでしたら、もうあたいは大丈夫です。歳を気にしてらっしゃるのですたら、ご心配無用です。あたいこれでも立派に大人だと自負しておりますから！」

心配は要らない。だってあたいは強いから！

そう考えて、応えた。

「あなた自身がそう思っているのですたら、問題は有りません。でも、大変だったら、私の事を思い出さない？ 私はあなたの事をいつまでも、思っておりますからね？」

師匠は、優しくそう言ってくれたのであった。

「では、式は？」

「貴方が望む通り」

「それでは、二週間後に。あたいは、それまで『神憑け』の儀式のために精進します」

急ぐ必要は、立派にイタコとしての業績を上げたいから。では無かった。ただ、慶太の事が頭にあつた為である。

それからの『神憑け』までにやる事は次のようなことであつた。

穀断ち（修行または立願成就のため、ある期間、穀類を食べないで生活すること）

火断ち（神仏への祈願や病気治療のため、ある期間火を使わないで生活すること）

塩断ち（神仏への祈願や病気治療のため、ある期間塩けのある物を食べないこと）

などの断ち行。

水垢離（冷水などを浴びて身を清める）

などの潔斎精進。である。

それらを何とか乗り越え、あたいは、神聖な『神憑け』の式当日を迎えた。

『神憑け』をする当日は師匠の家に、家族親戚などが集まる風習があり、あたいは両親を呼んでおいた。その他の親戚一同は、あた

には呼ぶ必要が無いと判断したからである。

そして、師匠と対座し、『神憑け』の儀式は始まる。

基本的に、祭文や経文を暗誦し、精神がトランス状態（失神などの変化）になるまで行われる。

あたいは、それが自分の身に起こるまで暗誦し続けた。まるで身体と精神が分離するかのような気分で、行った。

そして、それは、無の境地のような気分がした時に体に重い物が押し掛かるような気がして気絶したのであった。

こうして、気絶している間にあたいの守護神が『百虎』、ということが判り、無事『神憑け』は終了した。

あたいは、心配してくれていたそこに居た人々に感謝の意を込めて礼を言った。みんな、ホツと安堵したかのような感嘆の声をあげていた。みんなの表情が読み取れないあたいは、それで満足できた。こうして、あたいと言うイタコが完成したのである。

あたいが、イタコになったその理由のうちに、慶太の言葉を聴きたいと言う事が念頭にあった。それを成就するために、あたいはここまで頑張ったのだと思った。

だから、実行した。第三者の身体を借りて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514e/>

占夢者人の夢 ～伍ノ巻～

2010年10月9日15時41分発行